

長野瀆平翁の偉業について

長野瀆平翁生誕 200 周年記念事業
実行委員会事務局 山口健剛



みなさん、こんにちは。今日はお忙しいところお越しいただきましてありがとうございます。最初にお断りしておきますが、今回お伝えする内容につきましては、長野瀆平翁顕彰会事務局長の岩井賢太さんが作成されたものをベースにしたものです。どうぞご承知おきください。

先程、テレビ熊本制作の長野瀆平の生涯を説明したドラマをダイジェスト版でご覧いただきました。その中で、もう少し強調したいところをかいつまんで、付け加えたいと思っております。

長野瀆平翁の生涯と功績を一言でいいますと、「人生の晩年に一念発起し、六つの試練を乗り越えて熊本県の蚕糸業を進行させた実業家」と、そういう風な説明できる方だと思います。

突然ですがこの地図記号(右図)、何の地図記号かご存じでしょうか。これは、今使われていない地図記号ですけれども、蚕の話をする

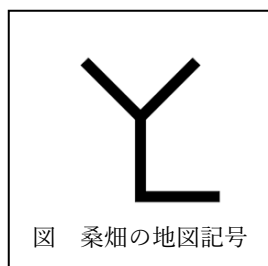


図 桑畑の地図記号

るのでピンとこられた方は多いと思いますが、これは桑畑の地図記号です。地図記号の中で、生産物をひとつの記号で表すものというのは、まずはお米(田んぼ)が思い浮かびますが、他には畑や果樹園など、広い表現しかありません。桑というものをわざわざ表記しているということは、この地図記号を作った当時、桑畑が相当日本に広がっていたためではないかと思います。ちなみに、これ以外に生産物がわかる地図記号は、お茶もあります。茶畑と田んぼ、桑畑は当時日本の代表的な土地利用だったと思います。残念ながら 2013 年に、桑畑の地図記号は使われないということになっているそうです。

話が脱線しましたが、本日はまず、みなさまにご存じかどうか、お尋ねしたいことがございます。かつて日本は世界一の生糸の生産国であったということをご存じでしょうか。大正から昭和、戦前まで約 30 年間世界一の生産量を誇っておりました。もうひとつは、養蚕の最盛期、昭和 4、5 年くらいがそうですが、日本の農家の 4 割、220 万戸が養蚕をされていたということです。熊本県内はどうであったかといいますと、全農家の半数の約 7 万戸が養蚕農家だったそうです。熊本県は、西日本一の養蚕の地という時期がありました。その中でも城北、県北と言いますか、山鹿・玉名・菊池は県内でも最も盛んな地域だったということが生産量等の記録でうかがい知れます。ただ、現在の私たちは、もはやそういうことを知りません。現在、県内の養蚕農家は山鹿市の 2 軒しかありません。非常に衰退した状況ではありますが、記録や資料ではかつての状況を知ることができます。

このように熊本県を蚕の主要生産地に仕

立て上げた方が誰だったかという、今日のテーマである長野藩平なのです。ご挨拶にもありましたけれども、彼は山鹿市の鹿本町の庄の生まれです。儒医（儒学者であり医者）がお父さんでした。そのあと20歳で横井小楠に教えを請い、横井小楠の高弟といわれるまでになりました。熊本城近くにある高橋公園に近代の偉人たちの銅像が今も並んでいますが、下の台のレリーフに長野藩平が刻まれています。

山鹿にはそもそも「蚕の神様」という方が江戸時代にいらっしゃいまして、今でいう鹿央町下米野というところ、そこに島已兮（しま いけい）という、藩平が生まれる70年くらい前に活躍された方がいらっしゃいます。この島已兮が藩の命令を受けて各地に養蚕を広め、のちに蚕の神様として崇められます。彼のお墓の側には蚕神社という、県内でも珍しい神社が今もあります。そういった土地であることが何かその後の発展を感じさせるものがあります。

藩平は24歳に南関の私塾の塾長となります。その中で養蚕富国論というのを提唱しつつ、弟子を育てていました。

そして時代がどんどん変わっていきます。幕末に近づいていくと日本は開国し、他国との貿易を始めます。ちょうどその頃、ヨーロッパでひとつの事件、困ったことが起こります。イタリア・フランスという当時の養蚕の中心地で、蚕が病気により全滅してしまい世界的に蚕の卵と生糸が足りないという状況になってしまいました。そこで日本に白羽の矢が立って、これをチャンスに外貨を稼ぐ手段にしようという流れが生まれました。幕末から明治の初めごろのことです。

この頃、藩平はというと、すでに46歳になっています。幕末から明治頃の平均寿命

を調べてみますと、およそ43～5歳くらいです。「もう少しで死ぬ」という歳に、藩平は色々始めていくのです。ちなみに、この平均寿命というのは生まれてすぐの赤ちゃんとかが亡くなると下がっていきますので、その波を乗り越えていくとだいたい60歳くらいまで生きていたそうですが、それでも人生の3分の2は終わっている状態です。平均寿命の3分の2を現在に置き換えて考えてみると、およそ60歳で新たに動き出すわけです。年齢を気にせず行動する、そういうところが藩平の魅力的なところだと思います。

先程のドラマでも紹介されていましたが、藩平は群馬県などの先進地を歩いて何度も見に行っています。最初は一人で行っていましたが後からは婿養子の親蔵を連れて行っています。藩平は実の息子がいるにも関わらず、塾生であった親蔵（19歳）を長女の婿養子にし、後継ぎに考えていたようで、親蔵は藩平の大きな期待を得るほどの、かなり聡明な若者であったと想像します。その後、藩平は親蔵と一緒に熊本県の養蚕の振興に向けて尽力するのです。先進地に行き、県へ養蚕振興の提言をします。48歳、49歳と連続して群馬、富岡製糸場などの先進地へ視察に行きます。富岡製糸場は現在、世界遺産となっていますね。同じ頃、藩平の提言により熊本県営の養蚕試験所が県内10か所に作られ、この山鹿市内の鹿本町来民（くたみ）にも建てられました。藩平はその統括責任者に就任しています。

そして藩平が50歳になったとき、当時の平均寿命では残り10年ほどという頃に、九品寺の養蚕試験所を大きくして、ようやく輸出できるくらいのレベルまで品質を向上させました。

そこから藩平に次々と困難が襲い掛かり

ます。数えてみましたら彼が受けた試練は6つでした。6回も心を折られるようなことが続くわけです。九品寺の養蚕試験所が、軌道に乗ったと思ったら台風で壊滅的な被害を受けている。それでも負けず、緑川沿いに、今の甲佐町ですが、有志の協力をとりつけて西日本で最大の工場を造ります。しかし、西南戦争によって大きな被害を受け、更に借金の返済を県より迫られ非常に苦しい状況に置かれます。これが2回目の試練。ここは国への直談判でなんとか乗り越えました。その後、秋の養蚕、秋蚕の孵化にも成功して、光明が見えてきたと思いきや、今度は第3の試練が襲いかかります。群馬の富岡製糸場で27歳の若さで副支配人として頑張っていた親蔵が、そこで暗殺されてしまうのです。濬平は親蔵を後継者に据えようと考えていましたが、その夢が潰れてしまったのです。悪いことは重なるもので、次は九品寺の養蚕試験所が火災により焼失してしまいます。第4の試練です。そして当時西日本一大きな製糸工場とうたわれていた緑川製糸場も閉鎖に至ってしまいます。第5の試練。この時、すでに59歳でした。やがて寿命が来てしまうところで、立て続けに試練が濬平に襲い掛かるわけですね。しかし、その後60歳で熊本製糸会社という会社を設立します。その操業も永くは続かず、6年目で養蚕業の遅れや原料の繭が不足というトラブルに遭遇してしまい、閉鎖に至るという憂き目にあってしまいます。ほとんどの人が隠居生活をしているような66歳の時に、彼は6回目の試練に襲われてしまうのです。しかしそれにもめげず、六度目の試練をなんとか乗り越えて、三男の関吉とともに会社を設立します。年齢は70になっていました。いつ亡くなくてもおかしくないような年齢で会社を設立し、養蚕・製糸

に力を尽くしたのです。その功績が認められ、明治29年、濬平が73歳の時に熊本県初となる勅定緑綬褒章を受章しました。

濬平の生涯をなぞっていきますと、苦しい時期しかなかったのではないかというくらい、本当に苦しい生涯で、しかし、不屈の精神で立ち向かっていたことが分かります。最初の話に戻りますが、このような努力の先に、日本が世界一の生糸の生産地になったわけです。ここ山鹿の地が世界一の生糸生産地のひとつになっていたということは、濬平の生涯における不屈の精神が成し遂げたといってもいいのではないかと思います。何度も訪れる苦難に対し立ち向かっていたところに、濬平の魅力が凝縮されているかと思います。

スタンリー・ボールドウィンというイギリスの首相は「人間、志を立てるのに遅すぎるということはない」という言葉を残しています。「諦めたらそこで試合終了ですよ」というのはバスケットボール漫画『スラムダンク』の登場人物、安西先生のセリフです。このような名言を実践してきた人というのが長野濬平であると、頭の片隅においていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。